

# 山と博物館

第47巻 第11号 2002年11月25日

市立大町山岳博物館



今年5月に付属園で生まれたシベリアオオヤマネコの子どもたち

(平成14年9月20日撮影)

## シベリアオオヤマネコの子ども公開

大町山岳博物館

大町山岳博物館では十一月九日、十日の二日間、今年の五月十三日に当館付属園で生まれたシベリアオオヤマネコの子ども二頭をはじめて一般に公開しました。飼育施設や健康管理などの問題から、これまで公開を控えていましたが、二頭が同月十二日に東京動物専門学校（千葉県）へ譲渡されることになったため、移動前に皆さんへの初お披露目とお別れを兼ねて公開することになりました。

二頭はオスとメス一頭ずつで、大町山岳博物館が友好提携を結んでいるオーストリア・インスブルック市のアルペン動物園から十一年前に贈られたシベリアオオヤマネコのつがい「アイガー」と「ミーコ」の間に生まれた双子です。誕生直後からしばらくの間は人工授乳で育て、はじめ二十cmほどだった体長は五十から六十cmになり、体重も十kg前後になりました。

健康管理に配慮したため、両日とも午後の一時間程度の公開となりましたが、公開初日の九日は雪の舞うあいにくの天候ながら、たくさんの方々が付属園を訪れました。訪れた方々は二頭のすばしつこい動きを目で追い、時折見せる愛らしいしぐさに目を細めていました。

十二日、二頭は東京動物専門学校へ無事に移動されました。学校では学生が飼育実習などの教育普及に二頭を役立てることになっています。まだ名前がない二頭ですので、良い名前を付けてもらつて、大事に育ててもらえればと思います。

# 山岳画家 茨木猪之吉

いばらきのさち

## 悟志 関

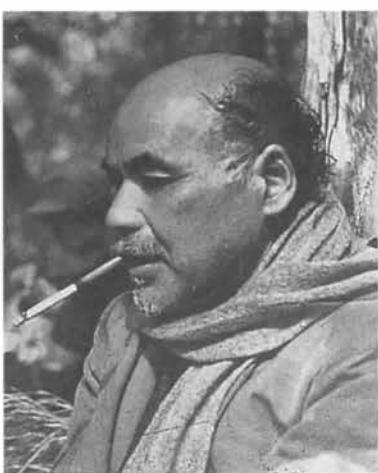


写真1. 茨木猪之吉 (横山駒子氏蔵)

なのだろうか。語句から見ると「山岳画」は「山岳風景画」と言い換えることができよう。つまり明治期に海外から日本へ持ち込まれた水彩・油彩といった西洋画の技法によって描いた風景画のなかでも、とくに山を主題として描いたものが山岳風景画で、山を主な題題として描く作家を「山岳画家」と呼んでいる。昭和十一年(一九三六)、猪之吉のほか丸山晩霞や足立源一郎といった画家たち総勢十名が創立会員となり、小島鳥水【注3】と藤木九三を迎えて「好んで山を描く画家の集団」として日本山岳画協会【注4】が立ち上げられた。猪之吉は同会において昭和十二年から四年間ほど事務局を担当していたようである。その創立に際し、昭和十一年三月刊行の「日本山岳会報」第五十五号に中村清太郎が「日本山岳画協会の創立に就いて」という文章を寄せている。この一文は山岳画の特性や可能性について端的かつ分かりやすく述べられているので、一部を抜粋して紹介する。

茨木猪之吉は明治末から昭和初期に活動した画家である。猪之吉と近代登山発展の時代背景については企画展図録『山旅への憧れ山岳画家茨木猪之吉展』(池田町立美術館、二〇〇二)で概要を記したので、ここではより具体的な内容について述べたい。

一、山岳画とは  
茨木猪之吉は「山岳画家」と形容されるが、はたして「山岳画」とは一体どのようなもの

(前略) 山岳画を大體風景画の一種と見ても、その主題たるあの大地の高揚した天邊の氣高さ、壯大さ、不思議さ、力強さ、その美しさには、又格別のものがあると思ひます。又その邊に、特に日本人に僕(ま)つ仕事があるやうに思はれます。但こゝにいふ山岳画とは、其題材を山頂とか山中とか狭く限定する様なものでは決して無く、遠望も山麓も其他渓谷、湖沼、草木、禽獸等の山に属するものは固より、天象、人生、神話、傳説なども山に關する限りは現實非現實に拘はらず

なつた。これを危惧した日本山岳会は昭和十七年十一月の臨時役員会でレリーフ取り外しを決定し、同会出席者の中から猪之吉と交野武一【注5】の二名が撤収作業のため上高地へおもむくことになった。

翌十二月八日、ふたりは取り外し作業を秘密裏に遂行するため、人目を気にしながら冬の上高地に入る。そしてレリーフは松本の石工二名の手によって取り外された。取り外したレリーフは猪之吉のザックの中へ丁寧に収められ、一行は逃げるよう上高地を後にしたという。その後、レリーフは東京へ持ち帰られ、日本山岳会事務所でしばらく保管されこととなる。その間、空襲による戦災で一部が焼け溶けるが、後に修復されて昭和二十二年に再び上高地の元の場所に取り付けられた。その後、昭和四十年制作の新しいレリーフに取り替えられて現在にいたっている。

当時、この出来事はその性格上、一部が知るのみであった。後年になり、関係者が残した記述や関係者への聞き取りによって、その詳しい様子が明らかにされた。猪之吉のご遺族の元に保管されていた資料の中に、このとき写した写真があり、これがレリーフ撤収の裏付けとなる資料となつた【写真2】。写真の裏には鉛筆で次のような裏書きがあった。

(ママ) 昭17-12-18-1 / 神河内 / ウ師壽像 / 撤収作業  
/ 石屋 / 勝利氏 / 茨木氏

【注6】

写真には四名の人物が写っている。雪のついた岩壁に二本のはしごが架けられ、それぞれの先端には一名ずつ人物(裏書きによると石屋)が立つて何か作業らしきことを行なつてゐる。その下には雪の積もる中、二名の人物がレリーフを破壊するとの風評も立つよう

(裏書きによると奥が穂苅、手前が猪之吉)がはしごに登つたふたりを見守つている様子である。

裏書きの「猪之吉」はもちろん茨木猪之吉であることは間違いない。「石屋」のふたりは松本市寿台で当時石工職を営んでいた二名(金子光雄と助手の原克巳)であることが分かっている【注7】。そして「穂苅氏」との裏書きが間違ないとすると、写真の人物は穂苅三寿雄【注8】ということになる。

この写真がセルフタイマーで撮影されたのではない限り、カメラのシャッターを切つた撮影者一名と写された四名の最低五名がこの現場に居合わせたことになる。つまり写真の裏書き通り、人物のひとりが猪之吉でもうひとりが三寿雄だとすると、撮影者は交野武一であり、石工二名のほかに居合わせたのは、猪之吉と交野、そして三寿雄の三名であると推測できる。

しかし、ウェストンのレリーフ撤収については、これまでに関係者の記述や聞き取りなどから詳細な調査と検証がなされており、当時現場に居合わせた人物について関係者それが違つたことを述べており、そこに誰がいたのかがはつきりしていない。ことに三寿雄についてはそのときには立会つていなかつたとされている。このことから、前述の推測を確かめるためには、今後より詳細な調べが必要である。

### 三、安曇野・上高地周辺への山旅

茨木猪之吉は若いころ、図画教師として小諸に住み、浅間山などに親しんでいた。それ以前には京都で絵を学んでいたこともあり、京都の町を描いたスケッチなども残している。



写真2. 上高地ウェストンのレリーフ取り外しの様子  
(横山駒子氏 蔵)

さらには北海道などに滞在したほか、遠く台湾などへも紀行し、その地の山々に親しんだ。

「對山館(大町)」における猪之吉の軌跡を探つてみたい。

本アルプスであった。日本アルプスの山々や山麓の風景などを描くために、長野県内の至る所へ画脚を立てている。なかでも北アルプスへの山行が多かつたようで、松本から白馬

まで安曇野中心に毎年のように旅をしたこと

が、残された作品や文章からうかがえる。

安曇野・上高地周辺への山旅では、その土地によって猪之吉には定宿があつた。槍・穂苅

ではない限り、カメラのシャッターを切つた撮影者一名と写された四名の最低五名がこの現場に居合わせたことになる。つまり写真の裏書き通り、人物のひとりが猪之吉でもうひとりが三寿雄だとすると、撮影者は交野武一であり、石工二名のほかに居合わせたのは、猪之吉と交野、そして三寿雄の三名であると推測できる。

馬方面へは四ヶ谷の余旅館(のちの白馬館)へは烏川の斎藤茂宅、後立山方面では大町の對山館、仁科三湖周辺へは築場の和泉屋、白

馬方面へは四ヶ谷の余旅館(のちの白馬館)

というようである。ここでは、猪之吉の自著『山旅の素描』(三省堂、一九四〇)から、大町周辺や上高地に

いたのが明治末から昭和初期まで後立山や立山方面への登山基地として賑わつた旅館對山館だつた。『山旅の素描』の中には對山館での様子を描いたスケッチ【図1】や二代目館主の百瀬慎太郎との交流について記されている(「岳人の欠伸」「案内者と共に」)。猪之吉は慎太郎と親しく交わり、昭和十七年に上高地でウェストンのレリーフを取り外した帰途にも慎太郎を訪ねて對山館に立ち寄つてゐる。

對山館に備えられていた雑記帳(百瀬堯氏蔵)にも次のような猪之吉の書き込みが残る。

(ママ) 白馬嶽山上にて油繪を製/作するつもりそれからは未定/大正四年七月二十日着/茨木猪之吉

このときの山行では對山館で友人(慎太郎)として挙げている。山行中の食事などでのさりげない氣使いが心に残つたらしく、上高地で初めて平蔵に会つたときに作つてもらつた「ゴヘイ餅」や先の立山から白馬までの山行中に作つてもらつた「暖かい飯とみそ汁」の美味しさを自著で述べている。

このほかにも大町から對山館を基点として針ノ木岳方面へも登つてゐる。百瀬家には猪之吉が慎太郎へ宛てた書簡や、慎太郎へ贈られた猪之吉のスケッチ帳や油彩なども残されている。

### 「和泉屋(築場)」

猪之吉が大町にやつて來た際に對山館とともに定宿としていたのが中綱湖畔築場の和泉屋であった。『山旅の素描』の中にも旅館の画生活が記されており(『旅の若山牧水』「浅春の山」「冬の三國峠」)、猪之吉の遺稿集『山の画帖』(朋文堂、一九五九)には「私の最

か)から天幕を借りて、四ヶ谷(現白馬村)の余旅館で山案内人に丸山岩司を雇つて白馬岳に十数日生活したと猪之吉は記している。

そして蘇平で露營しているときに志村鳥嶺と出会い作画場所に白馬大池を薦められ、大池のほとりに露營したとのエピソードも自著に記している。

八月八日 芦跡寺平蔵宅泊/八月九日 立山温泉泊(雨天)/八月十日 五色ヶ原野營(雨天、午後晴)/途中佐良峰にて今村幸男氏と遇ふ/八月十一日 鬼ヶ岳龍玉淨土を越し室堂泊/八月十二日別山越えより劍岳に登る下山/して劍澤三窓の岩屋に野營/八月十三日 仙人峠を経て小黒部鑑山小黒部谷に入る祖母谷温泉泊/八月十四日 南越より大黒鑑山泊/八月十五日 四ヶ谷に出で大町に着/日本山岳會員 茨木猪之吉及び平蔵

も愛する土地、それは信州はもちろん、北アルプス山麓、青木湖と中綱の間、築場の和泉屋旅館」（雪によせて）とあり、猪之吉が寄せた愛着の深さが感じられる。



図1.「對山館」より



図2.「和泉屋にて」『山旅の素描』より

猪之吉が消息を絶つ前後の様子は次の通りである。

昭和十九年（一九四四）九月十九日夜、夜行列車にて新宿駅発。  
昭和十九年（一九四四）十月一日、朝、松本駅着、徳本幹より上高地入り。  
昭和十九年（一九四四）十月二日、午前七時十分ころ、潤沢小屋を発つ。白出のコルで平林次男に見送られ白出谷を下る。  
以後、消息を絶つ。

昭和二十年八月某日、白出沢雪渓末端部、滝場にて小山義治が猪之吉のリュックサックの一部を発見。

この遭難は当時猪之吉が抱えていた諸般の事情や戦時中といつた社会情勢などから新聞などでは「失踪」と表現され、一時は自殺説までも流れたという。

おわりに

猪之吉が生きた明治・大正・昭和初期といふのは、ほのぼのとした山旅と同時期に急速な発展をとげて行く国内の近代登山との重なり合った時代であるといえる。猪之吉の足跡

「西糸屋（上高地）」  
猪之吉は上高地にもよく滞在した。その際は西糸屋が定宿であった。猪之吉は昭和十九年（一九四四）十月二日の朝に奥穂高岳の潤沢小屋を出発し、白出沢を下つてから消息を絶つ。その冬の搜索では見つからず翌年の夏になつてザック片だけが発見されている。この最後の山行の際も上高地では西糸屋に泊まっている【注9】。

猪之吉が消息を絶つ前後の様子は次の通りである。

昭和十九年（一九四四）九月十九日夜、夜行列車にて新宿駅発。

昭和十九年（一九四四）十月一日、朝、松本駅着、徳本幹より上高地入り。

以後、西糸屋に滞在。

以後、西糸屋を発つ。

以後、潤沢小屋に滞在。

昭和二十年八月某日、白出沢雪渓末端部、滝場にて小山義治が猪之吉のリュック

【注1】池田町立美術館 〒359-1160(長野県北安曇郡池田町大字会津七七八一) 電話(050)-611-66000  
【注2】茨木猪之吉は明治二十一(一八八八)、静岡県富士山の南麓(現富士市)に生れる。旧姓影山、本名伊之吉、幼名神奈川県の茨木家養子となる。その後、京都や東京で洋画を学ぶ。  
水彩・油彩のはかに、スケッチが巧みで、岳人たちのユーモラスな似顔絵や山旅での様子などを残す。また、山岳画家として名をあげてからは、日本山岳会機関誌「山岳」や小島烏水の著書など山岳関係の図書に多くの挿絵を提供した。著書に「山旅の素描」(三省堂、一九四〇)、「山の画帖」(朋文堂、一九五九)がある。大町山岳博物館では、「地高・潤沢池ノ平」(F8号、油彩・キャンバス、昭和18年制作)の一点を所蔵している。

【注3】小島烏水(明治六(一八七三)~昭和二十三(一九四八)年)は本名を久太といい、横浜商業高校を卒業後横浜銀行に勤め、そのかたわら文筆業を行つた。そして横浜でウェストンと出会い、明治三十八年に日本初の山岳会である日本山岳会(当時は山岳会)を有志らと結成させた。小島氏は明治四十二年の「白峰及び赤石山脈縦横断」登山に猪之吉を説いて、猪之吉は本格的な登山を経験する。自著の挿絵を猪之吉に描いてもらおなど親しく交友を行つた。

【注4】日本山岳活動協会は、現在千数名の会員が山をモチーフに精力的な活動を展開している。

【注5】文野武(明治四十一(一九〇八)~昭和六十一(一九八〇)年)は愛知県出身で明治大学卒後、昭和三十五年に明大アラスカ学術調査団のマッキンリーチ登山隊長、昭和五十六年には明大エベレスト登山隊隊長を歴任。会社を退職後は長野県上伊那郡長谷村浦の山中に独居した。

【注6】「神河内」とは「上高地」のことである。上高地の呼び名には様々な呼んでらでいるが、もともと地元では「カミグチ」と呼ばれていたといふ。「ウ師」とはウエ

を通じて、この当時に山をめぐる人々が醸し出していた一種独特的の雰囲気を感じ取ることが出来るのではないかと思う。

これまでに猪之吉は画壇において評価されてきたわけではない。登山史的な視点からの検証とともに美術的な視点からの両面からの検証がでければ理想である。今回、猪之吉の没後初となる公立美術館での猪之吉個人を取り上げた企画展が開催された。これを機会にひとりでも多くの方が茨木猪之吉という安曇野周辺や北アルプスゆかりの一画家と、その生きた時代の背景について少しでも関心を持っていただければ幸いである。

(大町山岳博物館学芸員)

【参考文献】  
「世界山岳百科事典」(山と溪谷社、一九七二)  
【別冊太陽 No.103 Autumn 1998】(平凡社、一九九八)  
「日本山岳画協会創立60周年記念誌」(日本山岳画協会、一九九七)  
北澤勝治著「茨木猪之吉」(大町市史)第五巻(民俗・観光編)  
第七章第一節四項五(一)(大町市、一九八四)  
「日本の山岳風景画—誕生と展開」(長野県信濃美術館、二〇〇〇)  
【注7】百瀬慎太郎著「山を想へば」(百瀬慎太郎遺稿集刊行会、一九六二)  
交野武著「茨木さんを憶ふ」(山岳)第四十三年第一号(日本山岳会、一九四八)  
石原きくよ著「山を想へば恋」(郷土出版社、一九九三)  
交野武著「茨木猪之吉画伯の遭難」(ケルンに生きる遭難の手記)2(一玄社、一九六二)  
【注8】鶴見三寿雄(明治二十四(一八九一)~昭和四十一(一九六二)年)は長野県松本市出身の北アルプス南部における初期の山小屋経営者。また、山の風景をカメラに収め続け付け時に雇われている。これらについては「日本山岳会信濃支部三十五年」(日本山岳会信濃支部、一九八四)に詳しく述べられている。

【注9】百瀬慎太郎と茨木猪之吉の関係としても知られる、「残された三人の『名』」と題して「山と博物館」第四十五号第六号(大町山岳博物館、二〇〇〇)で詳しく述べている。

## 訂正とお詫び

第四十七卷第十号二頁一段目十二行の(一六一九)は(一九一六)の誤りでした。訂正するとともにお詫びいたします。

山と博物館 第47卷 第11号  
発行元 長野県大町市大字大町八〇五六一  
市立大町山岳博物館

TEL〇二六一-二二一〇二二一  
FAX〇二六一-二二一〇二二三  
郵便振替口座番号〇〇五四〇一七一二三(五三)

印 刷 大 系 タ イ ム ス  
定 價 年額一、五〇〇円(送料共、切手不可)